

# 巻頭言

## 「外から自分を見る」

理事長 新谷 友良

網野善彦という歴史学者をご存じでしょうか？ 2004年に亡くなっていますが、1978年に「無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和」という本を発表され、専門家を超えて広く話題になりました。最近では、本屋の平積みに「日本の歴史をよみなおす」という本が置かれており、読まれた方もいると思います。

書かれた膨大な著作の一部しか読んでいませんが、日本は孤立した島国ではなく、昔から日本列島を取り巻く多くの海を通じて様々な地域と活発な交流を重ねてきたこと、日本が決して単一の民族で構成された国ではなく、北方・朝鮮・東南アジアなど様々なところに起源を持つ人の集まりであること、日本の社会も稲作が全国に行きわたった農耕社会と呼べるようなものではなく、漁民もいれば商工業者も活発に活動している非常に多様な姿を持った社会であることが書かれています。

また、私たちが日頃使い慣れている「日本」の国名が決して太古からのものではなく、天武・持統天皇の頃に始まった言い習わしで、中国（当時は唐）に対して大和朝廷が外交的に使ったもの、と書かれています。そして、中学校の歴史教科書が「縄文時代の日本」・「弥生時代の日本」などという表題を平然として使っていて、「太古からまとまった日本という国がある」という思い込みをまき散らすものと、非常に厳しく批判しています。

歴史的な議論は別にして、網野善彦が「日本」というものを地理的にも、歴史的にも一度つき放して、「外から見てみよう」という見方は、私たちが様々な事柄を見るときにも非常に大切だという気がします。私たちは、どうしても物事を「自分を中心に、今の時点から」見てしまいます。そして、そのような見方は自然であり、自分にとって分かり易く納得しやすい見方です。しかし、上手く言えませんが「自分を中心に」というのは、ある意味で自分に見えている範囲のことしか利用しておらず、「今の時点から」というのは、今に至るまでの様々な時間・歴史の積み重ねを利用していないような気がするのです。自分を空間的に・時間的に外から見てみるというのは、意識しての努力・歴史も含めたいろいろな勉強が必要で、大変難しいことですが、そのような別の見方があることをわきまえているだけで、今自分が思っていることが決して絶対ではないことを気づかせてくれるような気がしています。